



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ある現代思想家
Author(s)	秋間, 実
Citation	北海道大学人文科学論集, 5, 36-71
Issue Date	1967-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34284
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_PL36-71.pdf



ある現代思想家

秋 間 実

1

二十世紀はわれわれの世紀である。この偉大な世紀の思想全体が、今この著者によって初めて明らかにされる。芸術、哲学、社会科学の諸領域に亘って思考の方法の発展を辿り、そこに共通な生命を発見するには、視野のおそるべき広さがなければならない。またスターリン主義、ナチズム、人民戦線などに見られる思想と政治との深い絡み合い、そこから生まれた幾つかのタブー、それへ踏み込むには、並々ならぬ勇気を要する。更に、電子計算機の開発やレジャー時代の開始が告げる、われわれの世紀の変化のテンポを逸しないためには、新しさに対する特別のセンスが必要である。

この広さ、勇気、センスを持つ著者によって、二十世紀の思想の全体が、十九世紀へ方向においてでなく、二十一世紀へ方向において、ここに生き生きと描き出された¹⁾。

心をそそるこういうふれこみで、清水幾太郎氏の著書『現代思想』(上・下、岩波書店)が出版されたのは、1966年4月のことである。たかい学問的水準を示す労作をすくなくあつめている岩波全書²⁾の一環として、このようにアクチュアルな主題を扱う書物が刊行されたのであるから、このできごとが、現代の生活と思想と学問とに関心をいただくひろい範囲のひとつのあいだで、活潑な反響をよびおこしたことは当然である。

清水氏が現代世界の提起する思想的・哲学的諸問題を取りあげて論じたのは、これが最初ではない。社会学・社会心理学を専攻する氏は、周知のとおり、社会調査などいわゆる実証に主力をそそぐタイプではなく、現代日本の思想・言論界で最もはなやかに活躍する理論家のひとりになっている。敗戦後、1948年以来、平和問題談話会の最も活動的な会員としてはたらき、あの一の名文をもって雑誌『世界』その他で精力的に発言をおこなう一方、氏は、いつのころからか雑誌『思想』の編集に関係してきたとみられるし、そ

の有力な寄稿家のひとりである。「現代思想」ということばを冠した氏の仕事でわたしの目にふれたものだけでも、岩波講座『現代思想』(12巻, 1956-7)の企画・編集³⁾と論文集『現代思想入門』(岩波書店, 1959)の発表と『現代思想事典』(講談社現代新書, 1964)の編集とがある。著書『現代思想』は、やがて示されるように、氏のこのような現代思想研究者としての精力的な執筆・編集活動の現在の時点における総括ないし到達点とみてよいものである。

本稿は、この観点のもとに、この書を頂点とする氏の現代思想論の近年における展開を整理してその特質を検討することを、その目的とする。

2

まず、第1に、その大学卒業論文「オーギュスト・コントにおける秩序と進歩」の一部をもって雑誌『思想』(第111号, 1931年8月)というジャーナリズムの舞台に登場して⁴⁾以来、今日にいたるまで、氏の休まない執筆活動を一貫してかわらないいちじらしい特徴がある。それは、氏の現代性といってよい性格である。

これを印象的に示しているのは、さしあたり、たとえば、氏自身によるつぎの記述である：

昭和十一年、二・二六事件の直後、……二つの綜合雑誌が、申合せたやうに、流言蜚語に関する文章を依頼して来た。この事件の衝撃と、当局の舌足らずの報道とのために、既に沢山の流言蜚語が行なはれてをり、不安な空気を一層不安にしてゐたからである。原稿を依頼された日から締切までの十日間、私は、手当り次第、群集や輿論に関する文献を読み獵った⁵⁾。

その上で、氏は、原稿をふたつともみごとにしあげたのであろう。眼前の社会事象について解説や意見をたちどころに発表することができるという、平均的哲学研究者のあいだでは類をみないこのようなジャーナリスト的機敏さを、氏はもっている。氏が一時ある新聞社で論説委員としてはたらいたことは、いかにも氏の才能にふさわしいし、また、氏が、『思想』500号を記念して寄せた短文「無責任のすすめ」で、責任のもてる信用ある大思想ばかりを陳

列せずジャーナリズムに徹してほしい、と要望している⁶⁾ことは、思想家としての氏の姿勢をものがたっている。現代のアクチュアルな問題が氏にとっての問題なのである。

ところで、現代が複雑多岐である以上、氏が手がける問題もまた、それに応じてひろい範囲・数おおい種類におよぶほかはないであろう。氏の「視野のおそろべき広さ」を確認するためには、『思想』に氏がこれまでに寄せてきたおびただしい数の文章の題目をながめるだけでたり。めぼしいものをあげてみると、「現代に於ける人間の危機」(第142号, 1934年3月)・「日本的宗教形態について」(第149号, 1934年10月)・「思想家と思索家」(第160号, 1935年9月)・「ヒューマニズムのために」(第173号, 1936年10月)・「伝統に就いて」(第179号, 1937年4月)・「社会科学的認識に就いて」(第182号, 1937年7月)・「政治と虚言」(第185号, 1937年10月)・「自由主義の系譜」(第191号, 1938年4月)・「東洋の発見と創造」(第197号, 1938年10月)・「現実の再建」(第255・256・257号, 1943年8・9・10月)・「デューウィの宗教論」(第271号, 1945年11・12月)・「機械時代」(第314号, 1950年8月)・「大衆娯楽について」(第326号, 1951年8月)・「占領下の天皇」(第348号, 1953年6月)・「国民教育について」(第374号, 1955年8月)・「現代の思想について」(第381号, 1956年3月)・「[特集《性》の]はしがき」(第388号, 1956年10月)・「歴史の中の人間—サルトルについて—」(第395号, 1957年5月)・「現代社会とイデオロギー」(第403号, 1958年1月)・「特集「人工衛星」について」(第405号, 1958年3月)・「テレビジョン時代」(第413号, 1958年11月)・「組織・有機体・機械—思想史的スケッチ—」(第420号, 1959年6月)・「現代における価値の問題」(第425号, 1959年11月)・「サルトルたちと学生たち—故樺美智子に献げる—」(第435号, 1960年9月)・「大衆社会論の勝利—安保改定阻止闘争の中で—」(第436号, 1960年10月)・「理論と実践—経験のスケッチ—」(第459・461号, 1962年9・11月)・「模写と抽象」(第467・8号, 1963年5・6月)・「ビュロクラシー」(第492・3号, 1965年6・7月), といったぐあいである。さらに, 講座『現代思想』についてもみておくと, 「現代の思想と歴史」(I)・プラグマティズムの本質—デューウィを中心に—(VI)・「自由の観念」(VI)・「機械文明」(VIII)・「日本の革命」

(XI) のような論稿がある。以上の概観であきらかなとおり、氏は、伝統的に哲学で扱われてきた宗教とか価値とか経験とかの問題について論じるにとどまらず、日本の現実政治の諸問題とともとりくんでいるし⁷⁾、さらに、機械時代とかテレビジョン時代とかいうことばで示される現代文明社会一般の問題状況をも、いちはやく検討しているわけである⁸⁾。

清水氏のレパートリーのこのひろさは、社会学を専攻し、戦後とくにアメリカの社会心理学の手法の影響をうけ大衆社会論にまなんだ氏の、わたしをふくむ古色蒼然とした哲学者たち——氏の傾倒するジンメル⁹⁾の分類⁹⁾にあてはめれば「文献の心臓の鼓動」だけをきくものども——に比しての、思想家としての強みをあらわしている。

著書『現代思想』(下)では、1960年代の問題として、とくにアフリカ社会主義・電子計算機・レジャーが扱われている。核兵器の問題がとりあげられていないという非難¹⁰⁾には理由があり、また、現代世界のみかたそのものに、やがてみるように、いちじるしい疑義があるとしても、氏がともかくもこれを現代の思想的問題として扱うことができたという事実¹¹⁾にたいしては、さしあたり、率直に敬意を表しておく。氏は、「現代思想」研究家であるにとどまらず、みずから「現代」思想家なのである。

考えてみると、しかし、氏は、いまにかぎらず、つねに一貫して現代思想家であつたし、これからもひきつづきそうであろう。

3

第2に、日米安全保障条約改定阻止闘争(以下、安保闘争という)の時期(1959-60)をはさむここ10年ほどのあいだに書かれた上記の諸論文——そのいくつかは『現代思想入門』に収められた——をふくむ諸論稿を読み、著書『現代思想』を読むと、氏が安保闘争以後にマルクス主義の理論と運動とにたいする批判を急激につよめたことにもまた、つよく印象づけられる。かつて、一定の批判を加えながらも、敬意と共感と期待とをこめてマルクス主義について語っていたのに、氏は、いまでは、さっそうとした反マルクス主義の論客・

反共主義の闘士として発言する。この点を無視して一般的に氏の現代性について語るだけでは、およそ意味がない。むしろ、氏にはこの経過についてのいいぶんがあり、わたしは以下にそれを点検する。いずれにせよ、この転身こそ、著書『現代思想』に結実する氏の最近の思想の内容を根本において規定している、あらわな特徴にほかならない。

1. マルクス主義観の変遷の概要

1951年の『社会心理学』(岩波全書)末尾の「文献解題」は、つぎの文章で結ばれている：

遠い昔は、会話がコミュニケーションのノーマルな平面であつたらうが、現在は、新聞、放送がノーマルな平面を形作つてゐる。ところが、かうした技術が発達するに従ひ、却つて、この平面に表現されぬ、隠れた経験や願望が増大するといふ事實は、とかく、吾々を絶望の淵に近づける。アメリカの学者たちは、この事実について自ら深刻な診断を下してゐながら、而も、気休めとしか受取れぬ治療法、例へば、新聞の論説委員が科学的精神を以て論説を書けば万事解決する、といふ程度の治療法を勧めてゐる。どうして彼等は診断に釣合つた深刻な治療法に考へ及ばぬのか。それとも、故意にこれを避けてゐるのか。併し、私自身にしてみれば、…仮令傲慢に見えるにせよ、個人的平面を超える社会的平面の独自の意義を顧みて、その変革に多くのものを託さねばならぬことになる。個人的平面に横たはる問題と苦悩とを処理するためにも、社会的平面の意義を眼前に据ゑねばならぬであらう。 キュヴィリエがマルクス主義学説をヒューマニズムとして解釈した方法は、この点に於いて、多くのものを教へてゐる¹¹⁾ (強調秋間)。

ここには、1934-5年ごろ「マルクスやデュルケムの学説に固有な客観主義に対して強い不満を感じてゐた」¹²⁾氏が、アメリカの社会心理学と接触して「目が覚める思ひ」をして以後のながい遍歴のうちに、理論的にはマス・コミュニケーションの研究を媒介として手に入れることになった、社会心理学にたいする疑問と、それを動機とするマルクス主義学説にたいするあたらしい評価・期待とが、語られている。マルクス主義にたいするこの接近の実践的背景ないし基盤として、あの平和問題談話会を中心とする氏の活潑な社会的・政治的活動を想定することは、おそらく誤りではないであらう。

1957年に氏が「日本の革命」を書いたとき、氏はまだ「個人的平面を超え

る社会的平面……の変革に多くのものを託さねばならぬ」と考えていた、とみてよいであろう。日本の革命とは、具体的には、社会主義日本の実現ということである。以上のことは、つぎにかかげる個所で示される：

勿論、幾つかの技術的な不整合を除いても、〔日本国〕憲法は社会主義の憲法ではないという性格を有している。だが、憲法そのものの精神に従って、これをギリギリの限界まで生かし抜くならば、当然、われわれは、社会主義に最も近い地点まで進み出ることが出来る。…いや、社会主義という言葉の使用法の如何によっては、憲法を守りながら、ナシクズシに社会主義を築き上げることが出来るであろう¹³⁾。

このように、社会主義の樹立をこのましい価値とみなし、「憲法の擁護は、日本の革命の絶対の前提であると思う」¹⁴⁾氏が、つづいて、国会議員選挙のさいに憲法擁護を主張する候補者の絶対多数が所属する政党としての日本社会党ならびに日本共産党について、憲法擁護の未組織の大群としての民衆とのその関係を焦点に、論評を展開することは、当然である。

社会党については、「民衆は社会党に投票してくれればよい存在であって、投票の後には、政党が、というより、国会議員が万事を適当に処理するという態度」¹⁵⁾が指摘される。民衆は、有権者として・投票者として限定されている。このように「社会党によって限定された民衆は、現実の民衆に比して著しく貧しい抽象体に過ぎない」¹⁶⁾と氏は論じる。

この社会党批判も、みかたによっては、マルクス主義批判の一形態であるともいえるであろうが、清水氏のマルクス主義論は、氏がつぎに共産党について論じるときに、はじめて明示的にあらわれてくる。「社会党においては、民衆の前に国会の狭い門があったとするならば、共産党においては、民衆の前にマルクス主義の狭い門があると言わねばならない」¹⁷⁾。それは、「社会党にとって、民衆のエネルギーが警戒され軽蔑されているように、共産党にとっては、民衆の経験が警戒され軽蔑されているように見える」¹⁸⁾、という意味であり、ややくわしくみれば、つぎのような観察である：

〔共産党の立場では〕民衆が現実のうちで出会う経験は、経験そのものとして新鮮に理解されるより前に、既存の体系的思想に含まれる命題へ還元されてしまおうとする。どん

な経験があっても、それは既存の命題の真理を立証するために存在するものとなってしまう。逆に言えば、民衆の経験が発展して行くというのは、その発展の中から体系的な真理が真理として立ち現われて来る過程として予想されている。共産党が日本の民衆の先頭に立って戦って来た事実は否定しようがないけれども、その奉ずるマルクス主義が、どんな種類の経験に出会っても、それからフレッシュな衝撃を感じないという意味で経験への先天的免疫性を特質として来たことも否定しようがないと思う。新しい経験というものは、民衆の日常生活からも現われて来るし、諸科学の発展からも現われて来るし、世界の現実の推移それ自体からも現われて来る。しかし現われるや否や、それ等は、忽ち既存の命題や方式に還元されて、命題や方式から食み出した部分は副次的な事柄として捨てられる¹⁹⁾ (強調秋間)。

このように、マルクス主義においては「新しい経験が水々しい全体において正面から捕えられるということはない。言い換えれば、経験はマルクス主義の核心に触れることを許されない」¹⁸⁾とみるみかたは、すでに、たとえば、1948年の『社会学講義』にも出ていて²⁰⁾、以後、「マルクス主義という古い高圧的な学説」²¹⁾について語る現在にいたるまで一貫する、氏のマルクス主義観の「核心」をなすもの、といつてよい。

ところが、おなじ「日本の革命」のなかで、この認定にかんして注目に値する留保がおこなわれているのである。経験にたいするマルクス主義の「先天的免疫性」などと「そう一般的に言うことは危険であろう」として、氏は、つぎのように書く：

…マルクスやエンゲルスにしても、レーニンやスターリンや毛沢東にしても、先天的思弁によって学説を打ち樹てたのではない、発展させたのではないからである。彼等は、そういう思弁に対する烈しい憤りを感じながら、専ら経験の分析及び組織によって理論を作り且つ進めて来たのである。埋もれた経験に対する敏感ということは、彼等に共通なものであった。彼等は、自分自身の経験、民衆の経験、新しい科学上の発見、現実の条件の発展、そういうものから出発して理論の形成と拡充とに貢献して来ている。彼等は経験を恐怖しなかったし、軽蔑しなかった¹⁸⁾。

これは、日本共産党にたいする批判ないし注文として書かれている。日本共産党は「経験への先天的免疫性」を特質としてきたが、マルクス主義の古典

家たち・社会主義国の大指導者たちはそうではない、かれらに学んでもらいたい、というわけである。国際共産主義運動の創始者・大立物にかんするこの評価は、一般的にただしであるろう。マルクスは、革命的民主主義者としての「自分自身の経験」にもとづいて共産主義者となり、ヘーゲルの弁証法を唯物論的に改造し、ついに、当時の先進的資本主義国イギリスの「経験」を分析して『資本論』を書いたのであるし、エンゲルスは、マルクスを全面的に援助するとともに、とくに当時の自然諸科学のあたらしい「経験」にも依拠しながら、弁証法的唯物論を体系化した。レーニン、後進国ロシアにマルクス主義を創造的に適用して人類最初の社会主義革命をなしとげ、帝国主義とプロレタリア革命との時代の世界のあたらしい「経験」に応じて、マルクス主義学説を創造的に発展させたのである。かれと自然科学との関係については、のちにふれる。スターリンは、一国における社会主義の建設というこの前人未踏の「経験」をうけつぎ発展させ、最後に、毛沢東は、おくれた中国の諸条件のもとにおける革命闘争というあたらしい「経験」の独特なマルクス主義的把握にもとづいて、反帝・反封建の人民民主主義革命をなしとげることに成功したのである。マルクス主義学説が固定された閉鎖的な教条の体系でないことは、このひとたちの創造的な実践・理論がなによりも雄弁にものがたるところである。清水氏による上の評価は、こうした歴史的事実にほぼ照応しているといってよい。

ところが、この評価は急速に変化していくのである。そのゆくえを追うことは、なかなか興味ぶかい作業である。

はやくも1958年の論文「現代社会とイデオロギー」において、日本共産党の手本としてすすめられたマルクス主義の諸大家のうちで、マルクスならばにエンゲルスとそのほかのひとびとが区別されることになる：

プロレタリア・イデオロギーとしてのマルクス主義が単純にイデオロギーに尽きないのは、一面、…プロレタリアの世界史的地位ということにもよるが、他面、科学、即ち、マルクス及びエンゲルスの謂わゆる *die wirkliche, positive Wissenschaft* を含むことによるであろう。それは空虚な思弁の終るところに始まるものであり、全く経験的なも

のである。抽象的思弁即ちイデオロギーへの彼等の嘲笑は、いつも経験的科学への彼等の尊重と表裏一体を為している。…しかし、発展を続けて行く経験的科学に対して、マルクスやエンゲルスが示したような素直な尊重の態度は、マルクス主義のその後の発展の中で何処かへ消えてしまった²²⁾。

アインシュタインの特殊相対性理論がソ連においてははじめ「観念論的」とみなされたという事実²³⁾などを想起すれば、マルクス主義の発展のある段階で氏の指摘が的確にあてはまるような場面がみられたことは、否定できない。そして、わたしがつぎに検討しようと思う氏のマルクス主義批判の「その後の発展の中で」上の文章の意味を推しはかってみると、ここで氏が、上の „die wirkliche, positive Wissenschaft“ という表現の出典である『ドイツ・イデオロギー』におけるマルクスならびにエンゲルス——とくに「マルクス青年」——の「経験」尊重と対比して、『唯物論と経験批判論』におけるレーニンの「経験」・「経験論」ならびに「経験的科学」把握を、このような否定的・イデオロギー的態度の根源として念頭においていること、疑いをいれないように思われる。すでにここで、一方、マルクス青年が清水氏の理想のマルクス主義者としてたちあらわれ、他方、レーニンが——むろん日本共産党の思想・行動をも支配する——ドグマ化された現代マルクス主義と氏の考える理論体系の象徴とみなされている、とわたしは考える。

とはいえ、ここではまだ、具体的には史的唯物論にたいし、「現在の状況はマルクス主義がアメリカを始めとする諸国における社会科学の発展をこれ以上無視することを許さない」²²⁾ という忠告が述べられているだけで、いいかえれば、マルクス主義の姿勢を氏の意見にそってただす可能性がまだ信じられ前提されている、ということができよう²⁴⁾。しかし、マルクス青年とレーニンとのあの対比は、つぎにみていくように、時とともに深刻化され拡張されていき、一方、マルクス青年はかわらぬ賞讃にかがやきつづけるのに、他方、レーニンにみずからを結びつける現代の正統的マルクス主義——とくに日本共産党のそれ——は、もはや救うことのできないしろもの（「時効にかかった学説」²¹⁾）ときめつけられていく。安保闘争における氏の深刻な

「経験」が、その場合、決定的役割を演じたのである。そのあと、氏は、マルクス主義を敵とする「新しい歴史観への出発」をおこなう。支配階級の期待のうちに、清水氏は、現在、この地点に立っているわけである。

以上の経過における個々の問題点について、つぎに論じよう。

2. 「マルクス青年」の評価

いわゆる疎外論を中心にすえる初期マルクス研究は、現在における哲学のひとつの流行である。『『資本論』ではなくて初期マルクス』²⁵⁾というそのやりかたは、正確なマルクス研究をうむことにならない、とわたしも考える。清水氏が、固定されドグマ化されたマルクス主義とみなして非難するものと対比して、最近、すぐつぎに示されるように、しきりにくりかえすマルクス青年賞讃も、その方式にかわりがあるわけではない。しかし、氏は、たいていの初期マルクス研究がかれを実存主義的にさええがきだそうとするのとはちがって、かれをプラグマティストにしたてあげようというのである。すなわち、氏は、著書『現代思想』において、「[ヘーゲルの] 哲学的体系をイデオロギーとして嘲笑し、経験と科学とを熱烈に擁護することによって、マルクスは、当時、「イデオロギーの終焉」を宣言したのであった」²⁶⁾、と述べ、同書の別の個所²⁷⁾では『ドイツ・イデオロギー』から数行にわたる引用をおこなうほどに、マルクス青年を優遇するのであるが、そのわけは、論文「二十世紀初頭」のつぎの文章が示すであろう：

誰でも知っている通り、マルクスの『ドイッche・イデオロギー』を読み始めると、途端に、「経験的」という言葉が全くくどいくらいに繰返されているのにぶつかる。ヘーゲル哲学の自己完結的な権威に自分を叩きつけて、みずから Unphilosophie という道を選んだマルクスにとって、経験的であるというのは、新鮮であること、人間的であること、反権威的であること、自分自身であることであった。新鮮であること、人間的であること、反権威的であること、自分自身であることによって、そこには、近代のイギリス経験論および現代のプラグマティズムにおける経験の観念が生きている²⁸⁾。

こう書いて、氏はデューウィのある著書を指示するが、以上は、同時に氏自身の見解でもあるであろう²⁹⁾。ふりかえってみれば、氏が「日本の革命」に

においてマルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン・毛沢東の「経験」尊重について肯定的に語っていたのも、じつはプラグマティズムの意味においてであったのであろう³⁰⁾。かれらのうちにプラグマティストをみることができたかぎりにおいて、氏は、かれらを賞讃したのであろう。上の引用のあとにわたしがしるしたコメントは、誤解でしかなかったのであろう。

しかし、初期マルクスをヘーゲル哲学との関係において氏のようにえがきだすことがどれほど一面的であるかは、ちょっと考えてみれば氏にもわかるはずである。マルクスは、「ベルンシュタインと同様、弁証法という言葉が禁じられたら、それだけで科学や思考の上に大きな進歩が得られる、と信じている」³¹⁾ 清水氏とちがって、ヘーゲルの弁証法にたいしてまじめな態度をとったのであった。上にもしるしておいたとおり、かれは、「自分自身の経験」にもとづいて共産主義者となり、世界を変革する実践をおこないながら、ヘーゲル弁証法を唯物論の基礎のうえに改作して、その「合理的核心」をとりだし、これを経済学の「科学的に正しい方法」³²⁾にしあげ、これを武器として『資本論』を書いたのである。ヘーゲルなしにマルクスがなかったことは、あきらかである。マルクス青年がヘーゲルの体系を——それこそ非弁証法的に——全面否定をもってほうむり去ったかのようにいいたててことを、氏はやめなければならない。

3. レーニンと「経験」・「経験的科学」

上述のとおり、清水氏において、1957年にはその「経験」尊重ゆえに初期マルクスとならんでたかく評価されていたレーニンが、はやくも1958年には、「経験」をあざけり拒否する固定されドグマ化されたマルクス主義の頭目とみられることになった、とわたしは解する。それは、論文「二十世紀初頭」と著書『現代思想』とにおけるレーニン『唯物論と経験批判論』の扱いかたにてらしてである。さしあたり、「誰でも『唯物論と経験批判論』を読めば、そこで経験や経験論がどんなに嘲笑されているかに気づくであろう」²⁸⁾、という個所を典拠としてあげるだけで、ここでは十分であろう。以下、氏のレーニン批判をやや立ちいって検討することにする。

レーニンの書について、1962年の論文に氏は書く：

これは、最初の頁から最後の頁まで罵倒と嘲笑とによって満たされた書物である。…コールの言うように、「マルクス主義の立場から見ても、非常にわるい書物」であろう³³⁾。

1966年の著書に氏は書く：

恐らく、『唯物論と経験批判論』は、嘲笑と罵倒だけで一巻の書物を作り得た最初のケースであろう。…コールを俟つまでもなく、これは、「マルクス主義の立場から見ても、非常に悪い書物」である³⁴⁾。

この4年間に、レーニンの著書の犯した罪についての氏の確信は、「であろう」から「である」へつよまったようであるが、論旨において両者のあいだに「発展」がみられるわけではない。

問題は、第1に、はたしてレーニンがあゝの書物のなかで嘲笑と罵倒だけのこととしているか、ということである。マルクス主義者は、「レーニンがマルクス主義哲学にもたらした新たな点」についての栗田賢三氏のつぎの概括³⁵⁾に、同意するであろう：(1) エンゲルス以後の自然科学の革命的発展をあとづけ、自然科学における当時の危機の本質が自然科学の豊富な事実に成果とブルジョア的方法論との矛盾という事情のうちにあることをあきらかにするとともに、その成果を弁証法的唯物論の立場から決算し概括して、唯物論の内容をゆたかにしたこと。(2) 観念論の当時最新の諸形態の批判。(3) 「物質」の概念を哲学的カテゴリーとして厳密に規定し、これとそのときどきの認識の発展段階において到達される物質構造についての物理学上の概念との区別を明確にしたこと。(4) 認識論を弁証法として把握し、マルクス主義認識論の基礎をなす反映論(模写説)を深めたこと。(5) 真理の決定的基準としての実践の意義を、エンゲルスの場合よりも具体的に規定したこと。(6) 哲学の党派性を明確にしたこと。(7) 革命的実践(自然科学における革命をもふくめて)を消化して、マルクス主義の弁証法を発展させ具体化したこと。以上の諸点は、清水氏の憎悪とはかかわりなく存立する「マルクス主義のレーニンの段階」に属する諸特質である、といってよい。

しかし、清水氏はこれに同意しないであろうから、つぎに具体的に、第2

に、レーニンと「経験的科学」との関係を、第3に、レーニンの「経験」ならびに「経験論」の概念そのものを、それぞれ氏のそれについての異議とてらしあわせながらとりあげてみよう。

そこで、第2. レーニンが、ふるい物質＝客観的实在の觀念にたてこもり、「現代認識論」・「最新哲学」・「現代自然科学の哲学」・「二十世紀の自然科学の哲学」などに代表される「新しさに向って侮蔑の言葉を投げている」³⁶⁾のに抗議して、清水氏は書く：

物質の觀念が安定していたエンゲルスの時代とは違って、レーニンの時代は、科学の發展そのものによって物質の觀念が著しく不安定になっている。新しい世紀とともに現われたプランクの量子仮説だけを考えても、神と人間とから独立に自然を客観的に記述するというデカルト以来の信仰はもう支持することが出来なくなっている。人間とは無関係なリアリティがあって、人間はそれを客観的に模写することが出来るという伝統的な思想は成り立ち難くなっている³⁷⁾。

…西ヨーロッパで、自然科学の進歩によって物質の觀念が著しく不安定になっている時に、レーニンの著書は、神に似た物質の居丈高な叫びに満たされる³⁸⁾。

これは、当代の代表的知識人として自他ともに許す氏の自然科学（とくに物理学）にかんする知識がどの程度のものであるかを示す、興味ぶかい資料といえる。こまかい点からいえば、プランクの量子仮説提唱は、1900年のことであるから、「新しい世紀」には属しない。が、これは、氏にはめずらしいちょっとした不注意にすぎないのであろう。内容的に意味がある誤りは、プランクの仕事が客観的实在の觀念をおびやかすものとされているところにある。プランクは、清水氏のいわゆる客観的リアリティの内部のことがらとして、熱放射のさいにエネルギーが一定量 $h\nu$ の整数倍ずつの塊をなして非連続的に変化することを仮定したのであって、これは、それ自体まことに革命的な仕事ではあっても、いわゆる認識主観と客観的リアリティとの関係についての「伝統的な思想」に衝撃をあたえるたぐいのものではない。氏は、問題の領域を混同している。また、プランクの実在論的確信³⁹⁾の強固さを知っているだけのひとも、上にその正反対の主張の証人としてかれの名が登場さ

せられているという事態の珍妙さを、いぶからずにはいないであろう。こうした事実は、氏がプランクの量子仮説について、また、プランクの哲学的・認識論的立場について、なにも正確な知識をもっていないことを推測させるのに十分である。こういう不正確な知識——ないしむしろ無知——にもとづいて、「レーニンの著書は、神に似た物質の居丈高な叫びに満たされる」といった氏一流の比喻をヒステリックにわめいてみても、それでなにも論証したことにならないのはいうまでもない。氏にたいし、現代思想家としてなにはともあれもっと「経験的科学」を尊重してもらいたい、と要望しないわけにはいかないではないか。——もしまた、このプランクうんぬんもちょっとした思いちがいであって、レーニンの時代に「自然科学の進歩によって物質の観念が著しく不安定になって」いたという氏の認定が、ラジウムなどの放射性物質の発見を機会に「物質は消滅した」とさわぎたてられたあの事態にかかわるものであるというのであれば⁴⁰⁾、わたしは、それをみごとに解明して「危機」を克服し、同時に弁証法的唯物論を前進させ豊富にしたレーニンの著書そのものを、あらためて氏に提示しなければならない。哲学的カテゴリーとしての物質と物質構造にかんするそのときどきの物理学上の概念としての物質との区別によって、物質＝客観的实在の観念の安定はあきらかなのである。「それはそれでよいであろう。ただし、私がそう言うのは、『唯物論と経験批判論』が一時的な状況の中で有意義な政治的文書、政治的闘争の手段であるという限りにおいてである。……しかし、『唯物論と経験批判論』を学問上の文献と見るならば、事情は少し異なって来る」³⁷⁾、と清水氏はいう。どのようにちがってくるのであるか。こんな留保は、くるしまぎれのいいのがれでしかない。この個所に、プランクを援用する上の文章がつづくのであるが、問題の「学問」にかんする氏の理解が「著しく不安定」であることは、いましがたあきらかにされたばかりであり、これにたいし、レーニンの知識と問題解決と物理学発展のみとおしとが的確であったことは、疑いのないところである⁴¹⁾。ところが、氏は、これとは正反対の誤りにほかならない当時の観念論的解釈をレーニンが支持しなかったからといって、レーニンは「新

しい経験」を嘲笑し「ロシアに流れ込んで来た贅沢で高級な諸観念」⁴²⁾ とたたかった、などと中傷するのである。レーニンと氏とのどちらが真理のかわりに立つものであるかは、あきらかではなかろうか。

念のためにつけ加えて論じておきたいことがある。物理学の進歩にともなう認識主観と客観的リアリティとの関係についての「伝統的な思想」が攻撃をうけることになったのは、後年の量子力学においてハイゼンベルクのいわゆる不確定性関係に示される状況においてであった。そこでは、よく主張されたように⁴³⁾、観測主観による干渉をその不可欠の契機としてふくむような、ないし、すくなくともその操作的意味⁴⁴⁾を明示することができるような、そういう物理的対象の概念しか許容されていないのではないであろうか。ここでは、したがって、清水氏が切に期待する唯物論の破産が示されるのではないであろうか。ちがう。不確定性関係のこの主観主義的解釈は、誤っている。「微視の対象は、抽象的に「それ自体」でとらえることはできず、それを観察する一定の条件においてとらえなければならず、これらの条件を考慮にいれなければならない。しかし、実験装置は、これを観察者が利用するとしても、それ自体が観察ではなく、ましてやかれの意識またはかれの感覚ではなく、客観的に存在する実在的な物理的物体……であって、これと微視の対象との相互作用は、まったく完全に、物質的なものである」⁴⁵⁾。わたしは、清水氏がこの事態についてもまた誤解をもつことのないように希望しておく。

第3. 以上、わたしは、レーニンが清水氏とはちがって「経験的科学」をふかく理解し尊重していること、かれが、「諸科学の発展」・「新しい科学上の発見」から姿をあらわした「経験」を「忽ち既存の命題や方式に還元」してしまうのではなく、「そういうものから出発して理論の形成と拡充とに貢献して」きたこと、を示そうとしたのである。最後に、レーニンの「経験」・「経験論」概念そのものに言及しなければならない。レーニンは、清水氏がほかの箇所⁴⁶⁾でもいうように、これにたいする「嘲笑と罵倒と」をこととしてしているのであろうか。

レーニンは、問題の著書のなかで、たとえば、つぎのように経験と経験論

とについて論じ、そして、この観点から、経験ないし経験論という表現にかくれて唯物論と観念論との対立を克服止揚する「第3の道」を発見したかのようにな称する、実証主義者たちの浅薄な議論にふくまれている混乱を、手きびしく——この点は疑いをいれない——批判したのであった：

すべての知識は経験、感覚、知覚から生じる。これはその通りである。しかし、客観的実在は「知覚に属するか」、すなわち知覚の源泉であるかどうか、という問題がおこる。源泉であると言えば、諸君は唯物論者である。源泉でないと言えば、諸君は首尾一貫しておらず、不可避免的に主観主義に不可知論に到達するであろう…。諸君の経験論、諸君の経験哲学が首尾一貫していないことは、そのばあいには、諸君が経験のなかの客観的内容を、経験的認識のなかの客観的真理を、否定する点にあるであろう⁴⁷⁾。

学問上の論争の主題となるに堪えるこのようにおだやかな趣旨の主張が、清水氏の目には、初期マルクスをプラグマティストにみたとするさきの個所につづくつぎの文章で氏がいいあらわそうとする、経験圧殺の暴挙にみえるのである：

これに引き比べて、経験および経験論を嘲罵するレーニンにおいて、物質はどこまでも高圧的であり、権威的である。誰かが物質を神と書き改めたとしても、読者にそう不自然な気持を与えないで済むであろう。そこには、ニュートン体系に相応しく、人間のいる場所が残っていない。聞こえるのは、物質の荒々しい叫びだけである⁴⁸⁾。

ただ比喩と連想とに訴えようとするだけのこの文章は、分析哲学者のいわゆる cognitive meaning を欠き、絶対になにごとをも論証していない。氏がその誤解にしたがって初期マルクスとレーニンを対立させてレーニンに悪態をつくこの文章でなにをいいたいのかは、しかし、容易に察せられる。つまり、レーニンが経験の客観的内容を否認するマッハ主義をきびしく批判し、かつ、プラグマティズムの経験概念をも擁護しない⁴⁹⁾ こと、マルクス青年をプラグマティストにしたてあげることはできそうに氏には思われるのに、レーニンにはとりつくしまもないこと、に氏は憤激しているのであろう。しかし、その感情を憎悪をこめていいただけでは、「学問」の話にはならないのである。

4. 安保闘争をめぐる

清水氏の年来の日本共産党批判については、上にふれておいた。その奉じるマルクス主義があたらしいどんな経験にたいしてもそれから新鮮な衝撃を受けとることがないという「先天的免疫性」を特質としてもっている、というのが、その核心であった。氏は、この批判が、安保闘争において共産党が広汎なひとびと・諸組織の改定阻止のエネルギーをひたすら抑制する役割を演じたという観察によって決定的に確証された、と考えている。氏は、日本共産党を、また、マルクス主義学説を、救いようがないものと断定し、これに見切りをつける。

氏はこの経験（「安保体験」）についていろいろな機会に書いているが、上掲の論文「二十世紀初頭」冒頭のつぎの記述によっても、氏の観察と意見との大筋はうかがうことができる。すこしながいけれども引用しよう：

一九六〇年六月に至る約一年半の間、安保闘争の発展と終末とを通じて、私たちは実に多くの新しい経験を得た。新しい経験の一つは、…久しく前衛という光栄ある名称を自己に冠して来た日本共産党が、安保条約改定阻止へ向って日に日に増大する大衆のエネルギーを事毎に抑圧したという異様な事実であった。…私たちが見たのは、終始一貫、改定阻止の目標へ向って成長する大衆の前に立ち塞った前衛党というものであった。安保闘争の末期、何十万という大衆が国会議事堂の周囲をグルグル歩くという儀式のような行動形態がグロテスクに固定してしまったが、このように大衆が国会議事堂に近づくということ自体、前衛党が頑強に反対し続けて来たことであり、図らずも、それが国会請願という行動形態によって突破された結果なのであった。…安保闘争を通じて、新しい進んだ行動形態は例外なく他の集団乃至個人によって提示されたものであり、日本の前衛は、これを阻止し妨害する点において大きな実力を発揮して来たのであった。言い換えれば、前衛がその本質である筈のラディカリズムを完全に放棄したところに、この捨てられたラディカリズムを学生その他の集団や個人が拾い上げたところに、そして、前衛が、これを拾い上げたものに対して岸内閣への敵意よりも更に烈しい敵意を示したところに、私たちの新しい経験の一つは成り立っている。…

…大衆の、運動の成長に対する抑圧だけが続けた末、最後に、安保改定が実現されてしまった時、つまり、安保闘争が敗北をもって終わった時、日本共産党は「大勝利」を叫んだ。なぜ、敗北が「大勝利」なのであるか。前衛というのは、私たちの経験から全く切り離された別個の思想や利害を持つものなのか⁵⁰。

これは、以下のやや立ちいった検討に先だって簡潔に特色づけておくとするれば、安保闘争の全過程を通じて「陶醉と幻滅と」を味わったかつてのトロツキスト同調者⁵¹⁾の安保闘争総括であり、デマゴギーにもとづく共産党罵倒である、ということができる。従来、右のプラグマティズムの観点から日本共産党とマルクス主義とに不満を述べていた氏は、こんどは、「左」のトロツキズムの立場からこれに絶縁状をたたきつけ非難をあびせることになったのである。

氏は、ふたつのことを述べている。第1に、つねに大衆運動の先頭に立って「未来へ食い込む鋭い錐」⁵⁰⁾＝前衛であるはずの共産党が、安保闘争において、「ラディカリズムを完全に放棄した」いわば後衛にすぎなかった、ということ、第2に、共産党がそのあげく安保闘争の「大勝利」を叫んだ、ということである。

第1の点については、まず、一般的に、つぎのことを指摘しておかなければならない。よく知られているように、共産党は、中央のいわゆる安保改定阻止国民会議で社会党から差別をうけ、幹事団体としてでなくオブザーバーとしてこれに参加したにすぎなかったことに象徴されるとおり、闘争の指導権をもつには程とおかったにもかかわらず、そこで一定の指導的・先進的役割をはたしたとみとめられる。それは、国会と全国の大衆とを結びつけるあたらしい戦術としての国会請願署名という方式、ならびに、有権者自身がかじかに大挙して整然と国会請願をおこなうというあたらしい戦術を、国民会議に提案し推進したのが共産党であったこと⁵²⁾、さらに、組織労働者が安保条約反対・岸内閣打倒という政治的スローガンをかかげておこなったあの全国的規模のストライキ（1960年6月4日・15日・22日）のすでに約1年まえに、その第6回中央委員会総会（いわゆる六中総）⁵³⁾決議において、政治的ゼネ・ストの問題を労働者階級と民主勢力とに向けて提起し、この提案をそれ以後さまざまな機会に組織労働者のなかにもちこんでその実現のために努力を傾けたのも共産党であったこと⁵⁴⁾、などをいう。清水氏が上に国会請願そのほか「新しい進んだ行動形態」について述べているところは、このようなよく知られた事実にもまったく反している。

しかし、共産党が前衛の役割をはたさなかったと氏がいう意味は、思うに、共産党が上のようなはたらきをしなかったということではなくて、——このような地味な努力を氏はもともと前衛という「光栄ある名称」にふさわしいものとは考えていないであろう、——もっと特殊的に、氏が熱烈な共鳴・支持を寄せていた当時の全国学生自治会総連合指導部（全学連中執派）にひきいられる学生集団の「ラディカリズム」・「革命的」エネルギーを共産党が抑圧した、ということであろう。

いったい、氏は、安保闘争の時期の政治情勢をどうとらえ、そのなかで改定阻止のためにどのような行動を大衆がとればよいと考えていたのか。それは、つぎの3つの引用で示されよう：

昨年〔1959年〕の六月二十五日、第三次統一行動の日、私は京都で同志社大学の安保改定反対の学生集会に出席いたしました。そこで学生諸君を包んでいる燃えたつような空気を吸っておりますうちに、困難は大きいであろうが、今度こそ勝てるのではないか、という希望が湧いて参りました⁵⁵⁾。

「デモ隊自身のなかには、ある躊躇いがあった。自分たちの力を測りきれないところから生まれたある躊躇いが…。午後4時ごろ、バリケードの一角が突破された。躊躇いから決意へ。決意は確信へ。「やったぞ！ 一一・二七！」この時、はじめて、日本の人民は、安保闘争における勝利の展望を驚嘆みにすることができたのだ。あの時の私自身の気持ちもそうであった⁵⁶⁾。

私は〔1960年〕五月二十六日のことをお話ししましょう。当日、国会を取巻いた人間は一七万と言われていますが、私は数のことよりも、顔のことが大切だと思います。憤りに燃えた一七万の人間がギッシリと国会を取り囲んでおりました。そして、岸首相は国会の大臣室にいます。だれでもすぐに思いつくのは、このまま静かに国会を包囲して、われわれの間から何人かの国民代表を選出して、岸首相に面会を求め、新安保の取消し、岸内閣の総辞職、国会の解散などの要求を、つきつけて、この要求が容れられるまですり込みを続ける、という方法でしょう。私もそう考えましたし、国会付近で出会った未知の人たちも口々にそう言っていました。…あの時、われわれは勝利の最も近くにいた、きめ手の一つをつかみかけた、と私は信じます⁵⁷⁾。

氏は、大衆のなかにあって、自己のたかまりゆく感情に陶醉し、敵・味方の力関係を冷静に社会科学的に分析・評価することを忘れ、その結果、国会議

事堂を包囲したデモ隊の巨大なエネルギーを首相個人に激突させさえすれば目標を達成することができる、とたあいもなく空想していたのである。

なるほど、大衆がことをなすにあたっては、その決意・確信のかたさ・ふかさという主観的条件はたいせつである。同時に、しかし、敵・味方ととりまく客観的諸条件を正確に把握することをおろそかにしてはならない。第1に、1959年の段階においてはむろんのこと、安保闘争の末期においても、独占資本は、たとえば八幡製鉄で熔鉱炉が1週間もとまるといような、手いたい打撃をうけることがあったか。逆にいえば、革命の主力部隊としての労働者階級の意識的・組織的狀態は、主要な生産点において1週間つづけて24時間ストライキを敢行できるほどに強力であったか。第2に、自衛隊にたいする工作が、たとえ首都でどのような事態が発生しようともすくなくとも政治的中立を堅持して「治安行動」に出ないことが確実であるほどに、おこなわれていたか。答は、きびしく否定的であろう。そういう条件のもとで、清水氏が1960年5月26日に空想し熱望した行動を改定阻止勢力がとったとすれば、どうなったであろうか。はたして警察は、17万の大衆におそれをなして、代表が岸首相に諸要求をつきつけるのをそのままみていたであろうか。結局、かれに会見を強要し、そのうえで諸要求をみとめさせるためには、国会突入という実行使が必要になったのではなかろうか。この事態に及んでなお、首相の指揮権のもとにある自衛隊がなにもしないでこれを傍観するというようなことが、考えられたであろうか。へたな将棋でまだ陣地も崩れないうちに王様がとられてしまうというようなぐあいには、高度に発達した国家機構をもつ日本の支配階級を屈服させることはできない、ということを、社会学者清水氏は理解できないのであるか。政治闘争の初歩にかんするおどろくほかはないこのような無知・幻想のうえに、全学連中執派トロツキスト集団の極左冒険主義に寄せる氏の共感・期待はきずかれていたのである。

この学生集団を純情な「怒れる若者」のようにみなすことはただしくない。かれらは、一見左翼ふうな過激な言辞をもって純真な一般学生大衆を煽動しながら、安保改定阻止闘争を妨害し混乱させ破壊するという明確な目標を追

求しつづけたのであった。第1に、かれらは、アメリカ帝国主義との闘争を終始一貫して絶対に回避した。ただひたすら日本独占資本に攻撃を集中せよ、といいながら、かれらは、第2に、整然とした国会請願デモを「お焼香デモ」と嘲笑するとともに、国会構内乱入・議場占拠などの極左冒険主義的戦術を呼号し一部は実行することによって、改定阻止勢力の行動の統一を破壊し、権力による弾圧を挑発することにつとめたのである。かれらの過激な言動がじつは意図的な利敵行為にすぎないのではないかという疑惑は、すでに当時から抱かれていたものであるが、のちに、かれらが右翼と結びつきその資金で行動していたことが暴露されるに及んで、この推測は裏づけられた。共産党は、トロツキストとたたかう方針をつとにきめており⁵⁸⁾、また実際に、社会党などととも、分裂と破壊とのその行動を非難してその抑止につとめた、と報告されている⁵⁹⁾。

共産党のこうした方針・行動が、清水氏の目には、前衛のラディカリズム放棄、大衆の革命的エネルギーの前衛自体による弾圧、要するに、民衆の「新しい経験」にたいするマルクス主義の「先天的免疫性」の確証、とうつるのである。これは、裏がえせば、とりもおさず、非科学的な認識と無責任な行動とを前衛に要求する、ということではなからうか。

高名な社会科学者のものとは思われないこのような感情的・非科学的視角は、安保闘争の評価をめぐる議論にも適用されて、さきの第2の非難になる。安保闘争が改定阻止勢力の「大勝利」に終わったなどとは、共産党をふくめて、だれも考えていない。共産党は、この歴史的闘争の「中間総括」として、「人民の大闘争によって、日米軍事同盟に重大な打撃をあたえ、それを破棄へおいやる歴史的条件をかちとったこと」、アイゼンハワー大統領の来日を阻止したこと、岸内閣を退陣させたこと、全国的・地方的ないわゆる安保共闘の組織が将来の全人民的統一戦線への道を切りひらいたことなどを、「いくつかの輝かしい成果」とみてはいる⁶⁰⁾。これは、しかし、「安保闘争が敗北をもって終わった時、日本共産党は「大勝利」を叫んだ⁶¹⁾、ということではない。清水氏のように勝敗判定の瞬間を改定発効の一瞬にしぼりその判定の基準を改定

阻止の成否の一事にしぼる、という観点を共産党はとっていない、ということにほかならない。わたしは、全面的にかつ長期の展望のなかで安保闘争を評価することができず「敗北」を呼号して幻滅感・挫折感におちいるほかなかった氏はまことに科学的でない、と考える。

いずれにせよ、氏は、「陶醉から幻滅へ」⁶²⁾のこの安保体験のあとで、身も心もつかれはて、「日本の革命」にはっきり見切りをつけ、マルクス主義と共産党とをはっきりみかぎって、書齋にもどる。ここで氏は、アメリカ直輸入の「新しい歴史観への出発」をおこない、これへ傾倒するなかでいよいよヒステリックにマルクス主義嘲罵の調子をあげることになる。

〔附〕 人民戦線について

「新しい歴史観」とこの出あいについて検討するまえに、氏がこれと平行して安保闘争ののちに手がけた、1930年代のフランスおよびスペインにおける人民戦線の研究に言及しておこう。その動機について氏は書く：

素人の私がそこ〔＝安保闘争における諸組織の行動様式〕に見たものは、偽善であった。同時に、自分自身の傷であった。傷はなおらないであろう。しかし、傷の痛さで覚めた眼には、今まで見えなかったものが見えるかも知れない。そう思って、私は、運動の中でいつも美しい神話のように語られて来た、一九三〇年代のフランスおよびスペインの人民戦線の研究を始めた。研究が私に教えてくれたのは、日本とは比較にならぬ大規模な偽善と犯罪とであった。それを日本の読者に知らせるというのが、いつか、『現代思想』を書く私の一つの張合いになったように思う²¹⁾。

あの反ファシズム闘争のこの誹謗は、ナチズムの免罪⁶³⁾とあわせて、こうして、『現代思想』第2章を構成することになるのである。

安保闘争における「偽善」と氏が呼んでいるのは、これに先だつ文章によれば、共産党に代表される諸組織が「しばしば、明らかに目標の達成に不利な方向へ積極的に動き、達成に有利な方向に動く人々を警官隊以上の烈しさで敵として取扱い、目標の達成の不成功（敗北）が確定した瞬間「大勝利」を歓呼したという、わたしたちがすでに知っているあの事態であるから、この「偽善」に失望し、「傷の痛さで覚めた眼」で1930年代のスペインとフラ

ンスとをみなおそう、というのは、つまり、陶酔ののちに挫折し幻滅を味わったトロツキスト知識人の立場に身をおいて、その価値判断つまり反共主義をもって、人民戦線をながめよう、ということなのである。そして氏は、そこに予想どおりの——いや予想以上の「偽善と犯罪と」を発見して、満足する。こうして、自分の安保体験と1930年代の「西洋のインテリ」たちの苦痛にみちたそれ——フランスとスペインとのほか、独ソ不可侵条約締結によるソ連への絶望も加わる——とを、氏はかさねあわせることになる⁶⁴。フランスの人民戦線は、超階級的な「フランスの和解」であり、「革命の断念」であったし⁶⁵、スペインのそれは、アナキストが主力である「社会主義革命」・「真実の革命」を、「秩序と財産の守護者」としてのスペイン共産党・「ブルジョア政党と結んだ共産主義者」がソ連といっしょになって弾圧する組織であった⁶⁶。氏は、全学連中執派のトロツキストを安保闘争の「不幸な主役」にみたてたのと似たやりかたで、アナキストをスペイン革命の主力に示してあげている。氏の情熱は、この連中の観点に立って反ファシズム統一戦線を誹謗し共産党を中傷することにだけ注がれているのである⁶⁷。わたしは、氏の安保闘争論のでたらめさから判断して、氏の人民戦線論をそのままうのみにすることだけはすくなくともさしひかえたい、と思う。

5. 「新しい歴史観」

W・ロストウは、唯物史観に対抗する意図をもって書いたその『経済成長の諸段階』(1960)において、周知のとおり、伝統的社会→過渡期→離陸(飛躍)期→成熟期→高度大衆消費時代という5段階を設定している。その全面的検討はしばらくおくとして、ここで注目したいのは、この歴史観が、社会の産業化がいちじるしくすすめば生産関係すなわち社会制度の相違にかかわらず高度大衆消費時代を迎えることができる、としている点である。ロストウによれば、現代のアメリカはこの段階の社会であるというが、ソ連もまた、この段階へ移行する道を選択することができる産業化を達成しており、事実すでにこの段階へはいりこみかけている、という。⁶⁸ このように、この歴史観は、社会の生産の主導部門がいわゆる耐久消費財の生産と住宅建設などの

サービスへ移行したかどうかという指標だけに着目して、高度大衆消費の段階とそのまえの成熟期とを区別する一方で、国家独占資本主義と社会主義という、マルクス主義が基本的とみなす社会体制の区別を無視することを、その特徴としている。マルクス主義と絶縁した清水氏は、これにとびついて論文「新しい歴史観への出発」⁶⁹⁾を書き、ひきつづき『現代思想』においても、この見地に立って、現代の諸問題を論じているのである。氏の議論について批判したい点はおおくあるけれども、ここでは、さしあたり、つぎのことどもを述べるだけにしておく。

第1. 清水氏は、高度経済成長・所得倍増・技術革新・大衆消費・レジャー増加などのキャッチ・フレーズの意味するものを、独占資本の巧妙で大々的な宣伝の額面どおりにうけとり、それをそのまま解説している。つまり、独占資本の利益がこうした魅力的表現の背後で追求されているにすぎないことをかくして、高度経済成長等が勤労者の福祉を増大するためのものであり実際にまた一部はそれを実現したかのように、氏は述べたてる⁷⁰⁾。ここに氏のもののみかたの一面性があらわれている。サラリーマンが月賦で自動車を買ひ労働者も月賦でテレビ受像機を買うようになったという消費生活の変化に幻惑されて、氏には、「合理化」による失業や労働条件の悪化・中小零細企業の倒産・インフレーションと物価だか・重税・住宅事情のひどいわるさ・生活保護世帯の増加・挙家離農に示される農村の荒廃など、独占資本本位の高度経済成長政策の必然的結果としての勤労者の諸苦難が、みえないのである。まことにすぐれた社会学者、というほかはない。

第2. こうして氏は、以上のように、日本もまた高度大衆消費時代にはいったかのように書きたてながら、思想の問題にふれ、「生活水準が或る程度まで上がった時、人間は何を求めるのであろうか。……今まで思想と呼ばれて来たものは、結局、飢えの上品な別名ではなかったのか」⁷¹⁾、などと書く。「今日の無思想時代」は「一種の自然現象」にはかならないから、「大衆の政治的無関心を非難してみても、まして、外国の文化工作を糾弾してみても、あまり意味はないであろう」⁷¹⁾、というわけである。氏は、例によって、週刊誌に

読みふけりプロ野球と「くるま」との話に夢中になり組合活動に不熱心である、といった一部サラリーマンの生態だけから、「大衆の政治的無関心」・「今日の無思想時代」を帰結するのであろう。氏のこの粗雑なやりかたには、おどろくほかはないが、もっと重大なのは、こうした現象を氏が高度大衆消費社会における「一種の自然現象」とみて、それが独占資本ならびに政府の手で——マス・メディア支配による巧妙で大規模な商品宣伝や世論操作によって——人為的にうみだされる側面をいちじるしくもっていることをかくしている、という点である。「現代の社会心理」における「マス・コミュニケーション」の巨大な役割に注目してこれを「社会的麻醉剤」と断定していた1951年⁷²⁾の清水氏は、いったい、どこへいったのか。1960年6月17日の各新聞のあの「共同宣言」に「失望と憤怒と」を表明し、安保改定阻止勢力の事実上の屈伏を要求するその内容を「良心的記者を押しつけて、大資本としての新聞の意志が正面に出て来たのである」と解し、新安保条約の成立にはたしたその役割を強調していた⁷³⁾清水氏は、いったいどこへいったのか。

第3. 氏は、「歴史法則」という観念について、否定的に語っている。まず、資本主義の必然的崩壊という『資本論』第1巻のドラマが筋書どおりに進行しない、という意味で。つぎに、それと知ってみれば、そもそも歴史の必然的進行という宿命論そのものがただしくない、という意味で。

(1) 『資本論』第1巻における「資本の論理」の展開（一方の極における富の蓄積と他方の極における貧困の蓄積とへの壮大な両極分解→労働者階級の革命化→「収奪者の収奪」）を誤りとする氏の主張の根拠は、その基礎におかれるいわゆる窮乏化法則が事実にあわず誤っている、という氏の確信である。その根拠はといえば、資本主義のもとでも実質賃金は上昇する、ということである。「こうして、プロレタリアの神話に反して、生活水準の向上に伴う労働者の明らかな保守化が起こる」。資本主義社会の「大破局」は生じなくすむ、というのである⁷⁴⁾。

ここでも氏は、高度大衆消費時代の錯覚に鼓舞されているように思われる。たしかに、労働者階級の一部にも、上に検討したような消費生活の変化や思

想的状況がみられはする。しかし、だからといって労働者階級の生活状態が全体として改善されてきているなどと結論するのは、一面的である。というのは、自動車やテレビ受像機などに象徴される生活様式の変化に反映された消費水準の一般的向上という状況のなかで、労働者の実質賃金が——好況のおかげや労働組合の闘争の成果として——いくらか上昇したとしても、国民所得全体のなかでの労働者階級の取りぶんがたえず相対的に減少する結果として、それはそのときどきの社会の標準的生活を実現するにはいつもはるかに及ばず、労働者は消費水準の向上と自分の欲望充足能力との不照応にいいよ苦しまなければならない、という事態はなくならないからである。つまり、主要な生産手段の資本主義的所有がつづくかぎり、独占資本の意のままにそれが稼動されその成果も配分されることは結局のところ避けられないので、この「鉄の法則」はつらぬかれるほかないのである。資本主義の基本的傾向としてのこの窮乏化をなくすためには資本主義制度そのものを打倒するほかはないという認識を、労働者階級がどれほどわがものとすることができるかに、資本主義の運命はかかっている。

(2) マルクス主義では、このように、労働者階級の自覚という主観的要素を決して無視することはないのに、清水氏は、たぶん、「人間の意識がその存在を規定するのではなく、逆にその社会的存在が人間の意識を規定するのである」という史的唯物論のあの基礎的命題につまずいてであろうが、土台としての生産関係自体がいわばひとりあるきして必然的にあの大破局を招来するといった宿命論を、マルクス主義がとっているかのように説く。つぎのいくつかの引用は、それを示すであろう：

自由放任思想が、人々の利己的な行動の総和が「見えざる手」に導かれて美しい予定調和に辿りつくと考えののに対して、マルクス主義は、同じ総和が資本の論理のままに不可避免的に大破局に落ち込むと考える⁷⁵⁾。

個々の人間の意識や目的や努力を無視し嘲笑し蹂躪して自己を実現する歴史の法則があるだけである。目的は個々の人間の側から消える。そこから消えた目的は、いつの間にか、社会そのものの運動のうちに超個人的な形式で蘇る。すなわち、個々の人間の持つ目的が嘲笑されるのと引き換えに、社会の発展そのもののテレオロジーが現われて来

る。歴史が、人間の意識とは無関係に、自分の目的へ向って進み、その過程において無数の人間の目的や努力を手段として利用する⁷⁶⁾ (強調秋間)。

歴史が或る望ましい地点へ人間を導いて行くというテレオロジー……⁷⁷⁾。

下部構造自身が「鉄のような必然性」をもって或る法則に決定されたコースを動いて行くと説く決定論……⁷⁸⁾。

望ましい社会主義が必然的に生み出されるというオプティミスティックな決定論……⁷⁹⁾。

ここにいう「決定論」は、宿命論であり前定論であって、マルクス主義の決定論はこれとことなる。生産関係が、土台が、そこにおける窮乏化法則が、ひとりあるきするのではない。それは、生産関係の変革の可能性を用意するだけである。この可能性が現実性に転化させられるのは、この変革によって利益をうける労働者階級が、現存の生産関係の維持を利益とする独占資本とたたかってこれを打倒することによってだけである。この闘争は、両勢力の階級的力関係・政党の指導力・個々人の自覚や意志の程度そのほかの個別的諸条件にも依存するので、複雑な経過をたどる。しかし、おそかれはやかれ、あたらしい生産関係すなわち社会制度が、労働者階級のこのような奮闘・自覚的政治的行動の結果として樹立され、客観的経済法則で準備されている社会発展の基本的進路が現実のものとなる。このとき、ここに歴史の法則が実現された、これが歴史の法則である、とマルクス主義者はいうのである⁸⁰⁾。

マルクス主義を「過去から流れ出る未来を宿命論的態度で待つことしか知らぬ科学」⁸¹⁾と中傷するのは、マルクス主義についての氏の無理解ないし曲解を示すだけである。

第4. このように宿命論と解された歴史的決定論に機械的に反撥して、氏は、正反対の極へはしり、人間が思いのままに未来を設計できるとでもいうような「計画の哲学」を提唱するにいたっている。「社会には神秘的な、来世的な力のなにもものもないことを証明し、人間自身がその歴史の創造者であることをしめした」⁸²⁾のがマルクス主義ではなかったかのように、なにかあたらしい真理を発見したとでもいうように、氏は力みかえっている：

人間は、十九世紀の思想体系におけるように、決定されるものとしてでなく、決定するものとして現われる⁸³⁾。

むろん、氏の「人間」は、マルクス主義の「人間」とは本質的にことなる。

「他面では、マルクス主義は、人間がかれらの歴史をつくりだすのは、気ままにではなく、過去いく世代にもわたって受けつがれてきた客観的・物質的諸条件にもとづいておこなうということを、立証した」⁸²⁾のに、氏は、「人間は、一方、過去を非実体化しつつ、他方、自己の把持する目的に向って未来を形成しようとする」⁸³⁾、と書く。過去を非実体化できるとする以上、未来の設計・形成は現在の地点に立つ人間の思いのまま、ということなる。未来は無であり、人間は神に似た精神である：

決定論を捨てた人間は、裸で未来の闇に直面しなければならぬ⁸⁴⁾。

計画はニヒリズムを前提する。計画とは、神のいない世界に投げ込まれた人間が自ら神になることであり、デザイナーとしての神が死んだ時代の人間が自らデザイナーになることを意味する⁸⁵⁾。

法則が世界に内蔵されていないと判った現在、立法者になるものは人間のほかにないであろう⁸⁶⁾。

精神は、無としての混沌を法則に従って構成するものとして精神である。法則にしる、形式にしる、精神が自ら創造するものであり、精神は無に対する立法者である⁸⁷⁾。

このようなものが、清水氏の「計画の哲学」であり、「決定者乃至計画者としての人間を中心に据える歴史観」⁸⁸⁾——マルクス主義にかわる「新しい歴史観」の中心的観念である。

氏がいまごろになってこうした古いカント主義をもちだしてくるのは、なんのためか。第1に、独占資本に向かって、君たちの過去は免罪される、最大限利潤を追求する君たちの努力をさえぎるものはなにもない⁸⁹⁾、大いにおやりなさい、と激励するためであり、第2に、労働者階級を中心とする勤労諸階層に向かって、資本主義のもとでも至福の未来がひらかれる可能性があるかのような幻想をふりまき、それによって再び独占資本に奉仕するためであり、第3に、いうまでもなく、財貨の生産と分配とを電子計算機その他の手段の大はばな活用によってはじめて全社会的規模において計画的に実行できる社会主義制度の優越性をかくし、それによって3たび独占資本の歓心を買うためである。

カントのアプリオリ主義が自然法則の客観的性格⁸⁹⁾のまゝに挫折するほかはないように、清水氏の「計画の哲学」の破産は、およそ計画にあたって、このむといなとかかわらず、「過去いく世代にもわたって受けつがれてきた客観的・物質的諸条件」から出発しなければならず、たとえば、現在の国家独占資本主義の社会から出発すれば、封建的土地所有を基礎とする生産様式にはもとより、自由競争の時代の資本主義体制にすら復帰することができない、つまり、計画が客観的に条件づけられている、という単純な事実によって、あらず余余地なく証明される。

第5. 最後に、清水氏が、マルクス主義の「時効にかかった」歴史観を非難するために、論文「新しい歴史観への出発」でおこなっている日本共産党綱領批判について、一言しよう。

氏は、中学校および高等学校の日本史の教科書をなん冊か読んでみて、そこでは、「幕末から現代に至る諸事件の一つ一つがまるで小石のように取扱われ、これらの小石が無意味にぶつかり合って、鈍い音を立てている」こと、つまり、「最近一世紀の過去に一定の意味が与えられていない」こと、を知ったという。しかし、ここに、「曖昧ながら、一種の進歩的大歴史観があつて、いろいろの機会に、それが無意味な教科書を補ってくれているように思う」、と氏はいう⁹⁰⁾。この「曖昧」ないいかたで指示されているものが、共産党の綱領における現状規定ならびに革命路線であることは、みやすい。氏は書く：

この進歩的な見方によれば、日本人は、まず、民主革命と民族独立とを達成し、次いで、社会主義革命を実現する方向へ進まねばならない、と説かれる。しかし、このような歴史の意味づけは、日本は、後進資本主義国としては先進資本主義国に民主主義を学ばねばならず、敗戦によってアメリカに隷属した非独立国としては低開発諸国に学んで民族独立を達成せねばならず、資本主義国としてはソビエトなど社会主義国に学んで社会主義への道を歩まねばならぬということの意味する。J. ティンベルヘンの挙げる三つの地域を思い出せば、われわれは西に向って頭を下げ、東に向って頭を下げ、南に向って頭を下げねばならない。…この進歩的大歴史観は、十九世紀の歴史観が低開発国の問題を初めとして、それが予想していなかった数々の新しい事態に出会って破産したなれのはてであり、もっぱら政治的保身の必要によってとられた応急措置である⁹¹⁾。

わたしは、まず、この引用の末尾にかんして、清水氏にはマルクス主義の創造的發展という観念がまったくなくなっていることを指摘したい。この調子でいけば、レーニンの『帝国主義論』も毛沢東の『矛盾論』も、「新しい経験」の分析および組織によるマルクス主義学説の發展ではないことになる。両者とも、やはり、「なれのはて」であり「応急措置」であつたのか。ここに、マルクス主義をドグマとしてしかとらえていない氏の先入見があらわになる、とわたしは思う。「破産」するのは、氏の先入見の方である。日本共産党の綱領は、高度に発達した独占資本主義国でありながらアメリカ帝国主義に軍事的・経済的・政治的に——矛盾をはらみながら——従属してその目したの同盟国になっているという、現代日本のまったく独自の状況に、マルクス主義学説を創造的・発展的に適用しようとした集団的努力の所産である、と評してよい。

つぎに、しかし、わたしは、この綱領が真理であるかどうかについてあらそうとは思わない。ただ、そこでいう「アメリカ帝国主義と日本の独占資本の支配——二つの敵に反対するあたらしい民主主義革命、人民の民主主義革命」⁹²⁾を清水氏のようにばらばらに分解し、そのうえでどのように注解するのは、中学生にもそれとわかる悪意のこじつけ・でまかせでしかない、ということだけは、理解のしかたの問題として、つまり、知的誠実と品位とにかかわる問題として、確認しておきたいと思うのである。

4

わが現代思想家清水幾太郎氏は、上にみたとおり、安保闘争後のトロツキスト的個人的挫折感という感懷のうちに、デマゴギーをかさねながらマルクス主義からはなれていったにすぎないのに、いまでは、例の「新しい歴史観」にしたがって、20世紀後半の高度大衆消費時代における「新しい経験」が、マルクス主義学説とこれを奉じる保守的な前衛とを「時効」にかからせてしまった、などと述べ、独占資本本位の高度経済成長政策を手ばなしで肯定・讚美するのである。かつてマルクス主義をただしく理解したことがなく、日

本共産党には批判をもちつづけながらも、ともかくも反体制的・反権力的ではあった安保闘争までの氏の姿勢は、完全に影をひそめている。氏は、いまでは、支配体制に迎合する現代思想家に「成長」したのである。この変り身のはやさ・あざやかさこそ、「新しさに対する特別のセンス」をもつ俊敏なプラグマティスト清水氏の本領を示すものである。

氏の口調をまねていえば、こうであろう、——清水氏が現代思想の第一線ではなばなく活躍しつづけてきた事実は否定しようがないけれども、体制がわ知識人へのその転身が、学問的良心をふり捨て、マルクス主義にたいするデマゴギーをいいわけとしておこなわれてきたことも、否定しようがないと思う、と。

注

- 1) 『図書』第200号(1966年4月)、新刊広告。
- 2) 戦後は巻末に印刷されなくなってしまったが、岩波全書は、今日でも、つぎの岩波茂雄の「発刊に際して」のことばを編集の方針・基準にしている、とわたしは理解している、——「……岩波全書は現代学術の普及を目標とする。……在来の普及書のややもすれば知識の正確を欠く憾あるに鑑み岩波全書は内容を絶対的に信頼し得るものたらしめんため学術百科それぞれの最高権威者に懇請してその敏感熾烈なる学者的良心に委ね、……」。
- 3) これは明記されているわけではないが、各巻巻頭の編集者のことばの文体その他の特徴からみて、そう断定できよう。
- 4) 清水「無責任のすすめ」、『思想』第500号(1966年2月)、203ページに：「それは、自分の小さな学問的業績が認められ、公けにされたという誇りではなく、これでジャーナリズムの世界に出たという誇りであった」、とある。
- 5) 清水『社会心理学』(岩波全書、1951)、215-6ページ。
- 6) 前掲「無責任のすすめ」、204-5ページ。
- 7) ただし、全面講和運動や軍事基地反対闘争などとの氏のかかわりあいには、雑誌『世界』の当時のそれぞれの号の方にずっとよく反映されている。
- 8) 「大衆社会」の原語“mass society”の最初の使用(『社会心理学』141ページ以下)を氏は指摘する(「大衆社会論の勝利」、『思想』第436号、26ページ)。
- 9) G. Simmel『断想一日記抄一』(清水幾太郎訳)(岩波文庫、1938)、12ページ。
- 10) 坂本義和氏による。
- 11) 前掲『社会心理学』、224-5ページ。——論文「プラグマティズムの本質」(1957)が書か

れた時点でも、マルクスの思想は—デューウィ・サルトルのそれとともに—ヒューマニズムとしてとらえられていた。『現代思想入門』, 146 ページ, 注 (2) 参照。

ここに出ている A. Cuveillier, *Introduction à la sociologie*, 1936 にたいする氏の傾倒は、『社会学講義』(白日書院, 1948), 29-30 ページ, 注 (2), 204 ページ, 注 (1), によってもうかがうことができる。

- 12) 前掲『社会心理学』, 214 ページ。
- 13) 前掲『現代思想入門』, 294-5 ページ。
- 14) 同, 294 ページ。
- 15) 同, 300 ページ。
- 16) 同, 301 ページ。
- 17) 同, 302 ページ。
- 18) 同, 304 ページ。
- 19) 同, 303 ページ。——これとは別に, 「戦後の或る時期から, 社会運動の種々の領域に極めて顕著な, 明らかに過度な経験尊重が現われている。……幅を広くすること自体が目的のようになり, 目標への接近や到達ということが度外視されていることが多い。目標との関係なしに幅が広がる過程で, 敵と味方との区別が曖昧になっている」(同, 305-6 ページ), という正反対の事態——原則性の放棄——にたいする批判がある。あの「イデオロギー上の平和共存」は, これとおなじタイプの事態であった。マルクス主義の原則性の放棄にたいする氏のこの批判は, しかし, 発展させられることがなく, いずれにしても氏のマルクス主義批判の主要な側面ではない。
- 20) その 204 ページで, マルクス主義は「経験への免疫を誇る如き, 謂はば神学的性質を示す」, といわれている。
- 21) 清水「政治の世界・学問の世界」, 下, 朝日新聞, 1966 年 6 月 9 日号。
- 22) 前掲『現代思想入門』, 249 ページ。
- 23) Ph. フランク『アインシュタイン』(矢野訳)(岩波現代叢書, 1951), 363-5 ページ, 参照。
- 24) 近年ソ連において——ちょうど氏の忠告が容れられたとでもいうように——アメリカ的社会学が急速に隆盛に向かっている状況については, ときどき報告される。その経過と意味とについては, 別の機会に検討したい。
- 25) 内田義彦『資本論の世界』(岩波新書, 1966), 17 ページ。
- 26) 清水『現代思想』, 上, 68 ページ。
- 27) 同, 下, 260-1 ページ。
- 28) 清水「二十世紀初頭」, 哲学会編『歴史の哲学』(哲学雑誌第 77 巻第 749 号)(有斐閣, 1962), 69 ページ。
- 29) 一般に氏がデューウィに寄せる共感, 前掲「プラグマティズムの本質」(『現代思想入門』)では, 「デューウィの思想」にうかがわれる。なお, 注 (11) 参照。
- 30) 「私たちの眼から見ると, 社会党も共産党も左翼である。それと同じように, 多くの

人々の眼から見ると、マルクス主義とプラグマティズムとは、多くの共通点を有しており、そのため、一緒に「唯物論的潮流」として取扱われることがある」と氏は書いている(清水「理論と実践」, 下, 『思想』第461号(1962年11月), 118ページ)。氏はこの「多くの人々」のなかにはいいではないであろうか。

- 31) 前掲『現代思想』, 下, 412ページ。
- 32) マルクス『経済学批判』「序説」, (国民文庫, 1953), 294ページ以下。
- 33) 前掲「二十世紀初頭」, 64ページ。——前掲「理論と実践」, 下, 116ページ, 参照。
- 34) 前掲『現代思想』, 上, 98ページ。
- 35) レーニン『唯物論と経験批判論』(佐野訳)(岩波文庫, 1953), 下, 215-6ページ。
- 36) 前掲「二十世紀初頭」, 66ページ。
- 37) 同, 67ページ。
- 38) 前掲『現代思想』, 上, 99ページ。
- 39) その諸講演, たとえば, Die Einheit des physikalischen Weltbildesや Positivismus und reale Außenwelt, などにかがわれる。
- 40) 前掲『現代思想』, 上, 231-2ページの「科学の進歩」・「新しい物理学」は, そう読める。
- 41) 坂田昌一『科学に新しい風を』(新日本新書, 1966), 85ページ, 136ページ, 参照。
- 42) 前掲『現代思想』, 上, 97ページ。
- 43) たとえば, 下村寅太郎『自然哲学』(弘文堂教養文庫, 1942)。
- 44) R. W. Bridgman: The Logic of Modern Physics, New York 1927。
- 45) ソ連邦科学院哲学研究所『哲学教程』(森・寺沢訳)(合同新書, 1959), I, 197ページ。
- 46) 清水(編)『現代思想事典』(講談社現代新書, 1964), 171-2ページ。
- 47) 『レーニン全集』第14巻(大月書店, 1956), 147ページ。
- 48) 前掲「二十世紀初頭」, 69-70ページ。
- 49) レーニンという: 「唯物論の見地からは, マッハ主義とプラグマティズムとの相違は, 経験批判論と経験一元論との相違と同じくらいとるにたりない, 第十義的なものである, うんぬん」(『全集』第14巻, 323ページ)。レーニンがプラグマティズムの経験概念を承認できなかったことはあきらかである。なお, 最近における西がわの一研究 J. Thiele: W. James und E. Mach, in: Philosophia naturalis, Bd. IX, Heft 3, 1966, SS. 298-310 は, マッハとジェイムズとの思想の類縁性・両人の意気投合・とくにマッハにたいするジェイムズの賞讃をあきらかにしている。これは, レーニンの上の断定のただしさをはからずも支持する材料である。
- 50) 前掲「二十世紀初頭」, 45-7ページ。
- 51) 氏はこの「ステレオタイプ」化をいやがるにちがいないが, 氏の感情や思想は, これからみていくように, それほど個性的ではない。
- 52) 宮本顯治「わが党のたたかった道」, 『前衛』第172号(1960年9月), 18ページ: 「た

たとえば、請願運動については、われわれは、ただ代表が請願するということではなく、有権者すべてが国会に請願するという新しい戦術を採用することを提起しました。そして、その共産党の提案が四月二十六日には民主団体、共闘組織の熱烈な討議をへて一致して賛成された。それまでは、……つまり国会前にあつまってむこうと対峙して、そして突入の態勢をしめすという、こういう戦術しか実際考えられていなかったわけです。それ以外には多数の人民が確実に国会にちかづく方法というのは具体的に提起されなかった。わたしは、むしろ国民会議に出席していないし、その議事録(もし存在するとして)をしらべてもいないが、清水氏の記述とは正反対の内容をもつこの文章は事実を反映していると思う。

- 53) 『前衛』第158号(1959年9月), 177ページ。
- 54) 野坂参三「新しい勝利にむかって前進しよう」, 『前衛』(1960年9月), 6ページ, 宮本, 前掲講話, 19ページ, などによる。
- 55) 清水「安保戦争の「不幸な主役」」, 『中央公論』(1960年9月), 181ページ。
- 56) 清水「大衆社会論の勝利」, 『思想』第436号(1960年10月), 33ページ。
- 57) 前掲「安保戦争の「不幸な主役」」, 185ページ。
- 58) 前掲「六中総決議」, 177ページ, 184ページ。
- 59) 前掲「十一中総報告」, 18-21ページ。
- 60) 同上, 6-9ページ。
- 61) 注(21)の文章では、「諸組織は……目標の達成の不成功(敗北)が確定した瞬間「大勝利」を歓呼する」, というふうに表現されている。
- 62) これは、スペイン動乱に参加したオーウェルの『カタロニアへの讃歌』(1938)をイギリスのある批評家の特徴づけたことばであるという。前掲『現代思想』, 上, 205ページ, 参照。
- 63) すでに『思想』第458号(1962年8月)の「思想の言葉」(54-5ページ)において、清水氏は、ナチズムをただ没落する資本主義という下部構造の分泌する上部構造とだけみるのでは理解できない、と述べている。『現代思想』では、「ヒトラーが選んだ道が、実は、彼を俟つまでもなく、ドイツの歴史が既に選んだ道であったことが重要である」(上, 122-3ページ), というぐあいに、ナチズム興隆をもっともとする理由だけをあげて、氏は、要するに、ナチズムを是認し弁護するのである。本稿では、この点には立ち回らない。
- 64) 以上のことは、前掲「二十世紀初頭」, 47ページ, 前掲「理論と実践」, 上, 『思想』第459号(1962年9月), 91ページ, 「新しい歴史観への出発」, 『中央公論』1963年12月号, 37ページ, などに述べられている。
- 65) 前掲『現代思想』, 上, 168ページ, 175ページ。
- 66) 同上, 183-7ページ, 197ページ, 205ページ, 214ページ。
- 67) このようにはっきり反共主義という価値判断に身をゆだねてしまっている氏が、『現代

- 思想』第1章で、ヴェーバーその他をもちだして認識と価値との峻別を説くのは、筋がとおらない。
- 68) 日本訳 (ダイヤモンド社, 1961), 16-7 ページ, 178-9 ページ, 参照。
- 69) この論文の追隨者によるべたばめが, 日本分析哲学の論集『科学時代の哲学』3 (培風館, 1964), 252 ページにある。もっと注意ぶかく精密に分析してもらいたい, とわたしは思う。
- 70) たとえば, 「消費生活の驚異的な発展」(「新しい歴史観への出発」, 48 ページ), 「解説者や宣伝家がなんとかして無視しようとする日本の経済成長という事実, それと不可分の一般的な生活水準の向上という事実……」(『現代思想事典』, まえがき), 「当の社会が……半ばオートマチックな変化をとげ, この変化がサルトルのいわゆる「恵まれぬ人々」に必ずしも不幸ばかりではなく, ある満足をも与えている……」(「知識人の機能」, 上, 朝日新聞, 1966 年 10 月 12 日 (夕刊)), など。
- 71) 前掲『現代思想事典』, まえがき。
- 72) 前掲『社会心理学』, 104-25 ページ。
- 73) 前掲「大衆社会論の勝利」, 42-3 ページ。
- 74) 前掲「出発」, 44-5 ページ。同様の趣旨は, 『現代思想』, 上, 72 ページ (ベルンシュタインを引用して), 下, 272-3 ページ。
- 75) 前掲「出発」, 45 ページ。摂理論は宿命論の神学的把握であるにすぎない。
- 76) 同上, 46 ページ。
- 77) 前掲『現代思想』, 上, 25 ページ。
- 78) 同, 上, 72 ページ。
- 79) 同, 下, 414 ページ。
- 80) 秋間「歴史法則の概念」, 日本哲学会『哲学』第 14 号 (1964), 59 ページ以下, 参照。
- 81) 前掲『現代思想』, 上, 76 ページ。
- 82) 『マルクス＝レーニン主義の基礎』(日本共産党, 1960), 2, 201 ページ。なお, この本は, 1959 年に出版されたソ連の教科書の翻訳である。
- 83) 前掲「出発」, 47 ページ。
- 84) 前掲『現代思想』, 下, 415 ページ。
- 85) 同, 下, 408 ページ。
- 86) 同, 下, 404 ページ。
- 87) 同, 上, 225 ページ。
- 88) 事實は, かれらが価格カルテルを結成し, トラストをつくりコンツェルンを形成しても, 生産の無政府性から生じる諸矛盾の激化・資本主義的生産様式そのものの危機の深化を避けることができないのであるが, かれらは生きのこり勝ちのこることをめざして必死の競争をおこなうほかはないのである。
- 89) その単純な例証として, たとえば, 人間の祈願や希望といった主観的契機とは全くか

かわりなしに天候の状態が決定される，という事実をあげることができる。

90) 前掲「出発」，47-8 ページ。

91) 同，48-9 ページ。

92) 『前衛』第 187 号 (1961 年 9 月臨時増刊)，103 ページ。

—— 1967 年 2 月 12 日 ——